

THE GALLERY

もくじ ■特集|つくるよろこび その1:モビールをつくろう その2:海の形を想像する
■企画展|「REVISIT-コレクション+アーカイブに見る美術館のキセキ」[サーリネンとフィンランドの美しい建築]
「ニューアートシーン・イン・いわき 西成田洋子—記憶の森—」 ■常設展示室から ■学芸員ノート ■新館長からひとこと ■今後の展覧会

特集|special issue — つくるよろこび

その1:わくわくアートスクール 「モビールをつくろう」



当館では、実技講座や公開制作、ワークショップで様々な分野の講師をお迎えし、参加者に作る楽しさや喜びを味わってもらえる活動をしています。その中で、今回はコロナ禍において実施したオンラインによるリモートワークショップについて紹介します。

例年開催している「いわき市小・中学生版画展」、その催し物として絵本作家 むらかみひとみ先生を当館にお迎えして、1月16日(土)、17日(日)に色画用紙を様々な形に切って糸や針金でつないでモビールを作る、わくわくアートスクール「モビールをつくろう!」を開きました。この時、むらかみ先生が居住する東京都では新型コロナウイルス感染症が拡大していたことから、先生は来館せずリモートで講師を務めることになりました。先生は自宅のアトリエからカメラを通して作り方を伝え、参加者は実技講習室に集まってモニターを見ながらの先生の話聞き制作する形です。

ワークショップが始まる前は、講師と参加者が直接交流したり作り方を教えたりしないので、参加者の作品が完成するのか、スムーズに活動が進むのかと担当として心配しました。

しかし、活動が始まる前から、むらかみ先生と参加者はモ

ニター越しに楽しそうに雑談していて、その交流の様子はリモートであると感じさせませんでした。また、先生がカメラで手元を映しだし制作方法を説明すると、それを見て参加者は思い思いのモビールを戸惑うことなく作り上げていました。途中、分からないことや先生に作品を見てもらいたい時は、参加者がカメラの前に立って個別にアドバイスをしてもらっていました。モニター越しでも先生から励まされたりほめてもらったりすると参加者はうれしそうでした。

参加者がスムーズにモビール作品を仕上げることができたこと、また、むらかみ先生と楽しく交流することができたので今回のリモートワークショップは成功したと考えています。

今後も機会があればオンラインによるリモート実技講座や公開制作、ワークショップを開催したいと考えていますが、より複雑な技法や機材を扱う場合、その方法をどのようにモニター越しに伝えていくのかなど、リモートならではの工夫が必要になりそうです。しかし、今回はコロナ禍という状況において必要に迫られて開催したリモートワークショップで、参加者に作る楽しさや喜びを味わってもらえたことは意味のあることだったと考えています。
(普及係長 江尻英貴)

その2:Next World-夢見るチカラ展関連事業 ワークショップ「海の色を想像する」

ワークショップ「海の色を想像する」は、現代美術を楽しみながら新たな価値観でまだ見ぬ世界を想像し、創造する場になることを目指した企画展「Next World 一夢見るチカラ」の関連事業として、出品作家の潘逸舟さんを講師にお招きし、4月24日(土)、25日(日)に開催しました。美術館を舞台に、潘さんを中心に参加者がそれぞれの心の中に探り当てた海のイメージを作品としてアウトプットする二日間のワークショップは、自分について考え、また、自分らしく在ることを考える貴重な時間となりました。(学芸員 植田玲子)



潘逸舟 《海の色》 2012年 ヴィデオインスタレーション(3チャンネル[5分])

美術館というキャンバス

美術家 潘逸舟

小さい頃は絵を描いていた。気がつけば何も考えずに手を動かして、いつか絵を描きはじめてのかはよく覚えていない。絵を描くことは、ここではない場所を身体が勝手に想像しているような時間でもあった。また風景もたくさん描いたけれど、石膏像を描くのもかなり好きだった。私の家には石膏像がなかったので、買って来た石膏デッサン集をひたすら模写していた。模写は他人の表現に近づきながら、どう頑張っても同じにならないところがとても面白い。何枚描いても埋まることのない、見本の絵との差異は技術的な部分もあるが、私はそれが個性だとも思っている。100枚模写するとかなり見本の絵と近くなるが、それでもそこに存在する埋まることのない差異こそが、私自身であるのかもしれないと思う。それは埋めることができないし、埋める必要もないだろう。その差異の間にこそ自分が描こうとする絵を見つめることができるのだと思う。そして同じ絵を模写していながらも、描く環境や時間が全く違うし、その描く過程で想像しているものももちろん全く違う。そうやって絵を描く行為は、描く人の存在を痕跡としてキャンバスの中に残していくのである。

そんな中で、私は描く行為にまつわる想像力についてとても興味が沸いていた。表現を掻き立てるエネルギーはどこから生まれるのだろうか。そんなことをポーとしながら考える時間が増えていき、気がつけば私は、自分の身体がメディウムとなり、

潘逸舟(Ishu Han)さんプロフィール

1987年中国・上海に生まれ、1997年青森県に移住。2012年東京藝術大学大学院美術研究科先端芸術表現専攻修了。自らの経験を出発点に、社会と個の関係の中で生じる疑問や戸惑いを、身体表現、映像作品、パフォーマンスなど様々なメディアで表現している。2012年個展「海の色」など、個展、グループ展多数。

風景や生きている社会をキャンバスにしてパフォーマンスをしていた。パフォーマンスを記録していく映像作品は、自分自身の生活の痕跡を追いかけながら、その外側へと接続する部分を探しているようでもあった。

今回のいわき市立美術館でのワークショップは、美術館をキャンバスにして、そこにすでにあるものなどを使って表現することだった。そこには決まったサイズはない。作品だけを鑑賞するために訪れる美術館であるが、この場所をキャンバスにすることで、普段は意識して見ることのない美術館の細部まで、より詳細に観察することができるのではないのかと考えたのである。このワークショップを通して、私たちの想像力を支える美術館の風景を、参加者それぞれの視点で再発見できたらと考えた。

海のかたちを想像してつくること。

ワークショップ参加者 松本琳衣

企画展内で展示されていた潘さんの作品《海の色》を実際に見てとても気になっていたのでワークショップ参加に至った。たださえ内にこもりがちなうえ、こんなままならない時世もあってなるべく外の空気を取り入れようとも思っていたことだった。

一日目。実際何をやるか当日までわからなかった。はじめに、潘さんより自身や創作活動のルーツについて紹介を受け、スライドで過去作品を見せていただいた。シンプルなモチーフに様々な視点を与える作風はとても面白かった。私たち参加者に与えられたテーマは「海のかたちを想像してつくること」であ

るが、きれいな海を描きましょうといったものではなく、抽象度が高い。意味付けや表現する形も最初から最後まで自分に託されている。それでも、潘さんの作品に刺激を受けた私は非常にわくわくしていた。

初日は美術館のなかにある「海」を連想させるものを探すという課題でカメラ片手に館内を巡った。海がモチーフの展示物、石階段のきらめく反射、水たまり。各参加者から海を連想させるものが集まった。他の参加者にも連想や見立てはなかなか難しかったようで、色も形も違うものから想像して「海」だと言えるものを探すのは頭を使う。私も悩み、館内をさまよった。ふと私が小さかったころジャングルジムがあった1階ロビーの休憩スペースに立ってみた。一段くぼんで湾曲したその場所は、幼い頃この美術館で見ていた目線と明らかに異なっていて、自分が巨大化した感覚を得た。そしてあったはずのジャングルジムが撤去されている。月日の流れや変化を感じ、そこにあり続ける海、満ち引きで変化する海、海によって形を変えられる街などを連想させた。

二日目。半日かけて頭の中で考えたことを作品にする。各々展示室や館内各所に作品を設置し、発表しあいながら巡る。潘さんにアドバイスをもらいつつ、家から持ってきた雑多な道具類をなんとかつくりたいことに合わせて選り抜いた。頭で考えるだけだと悩んでしまうので手を動かしながら時間いっぱい作業した。ジャングルジムのミニチュアをつくり、顕微鏡、画仙紙、椅子を組み合わせ、海になった。発表は緊張したが、とても

面白かった。他の参加者からの質問や感想は自分の言葉を補う手助けになる。さらに思いがけないことがあった。後日、美術館スタッフに聞いた話によると、ある来館者が休憩スペースの一角に設置した私の作品を企画展の出品作品と認識していた様子だったとのこと。見ず知らずの人の目に触れ、そこにあるものとして認識されることに妙な感じがしたが、そういうものなのかもしれない。

作品をつくり、発表するプロセスはコミュニケーションのひとつとして機能することを改めて気づかされた。気鋭の作家と交流をしながら創作できる機会は大変ありがたく、刺激的な二日間だった。



上段:松本さんの作品。下段:皆の作品を見て回る。図書室で。

企画展 | REVISIT-コレクション+アーカイブに見る美術館のキセキ 10月1日(金)~10月24日(日)

本展では、開館38年目となる当館がたどってきた軌跡を、コレクションとアーカイブ資料から振り返ります。開館以来収集されてきたコレクションから、「写真、記録、記憶」「絵画、あそび、日常」「もの、自然、時間」など身近な視点で作品をピックアップして展示します。またアーカイブ展示では、美術館が作られるきっかけを作り出した「いわき市民ギャラリー」や、現代美術コレクションの核となった新潟の「旧大光コレクション」について、さらには歴代の企画展や普及事業を、写真やポスターなどの資料を通してご紹介します。あの日の懐かしい美術館、これまで知らなかった美術館の姿をぜひ見つけに来てください。そして美術館のこれからを想像する……REVISIT(再訪、再考)する機会となれば幸いです。



モーリス・ルイス 《Gamma Beta》 1960年

(主任学芸員 太田紋乃)

企画展 | サーリネンとフィンランドの美しい建築

11月6日(土)~12月19日(日)

エリエル・サーリネン(1873-1950)は、フィンランドのモダニズムの原点を築いた建築家・デザイナー・都市計画家です。大学の同級生とともに共同建築設計事務所を設立すると、若くして1900年パリ万国博覧会フィンランド館の建築を担当します。一躍名を上げた彼らは、国立博物館といった大きな仕事を受注する傍ら、郊外の湖畔に建設した自分たちの事務所兼共同住宅「ヴィトレスク」を始めとして、多くの住宅建築を手がけ、本領を発揮します。家具やテキスタイル、色彩豊かな室内透視図からは、内装を含めた総合芸術として住宅をデザインしていたことが窺われます。やがて駅や都市のデザインへと活動を広げる中で、サーリネンは同僚たちと袂を分かち、独自のモダニズムを追求し始めます。1922年にシカゴ・トリビューン本社ビルの設計競技で二等を獲得すると、翌年アメリカに移住し、後半生を送りました。本展では、図面、スケッチ、家具のデザインを通してその功績をたどります。常



ポホヨラ保険会社
ビルディング
中央らせん階段
Photo © Museum of
Finnish Architecture /
Karina Kurz, 2008

に人々の生活に寄り添ったデザインを希求したサーリネンの仕事は、生活様式の急変を余儀なくされた私たちに、今も変わらない価値を提示してくれるでしょう。

(学芸員 徳永祐樹)

ニューアートシーン・イン・いわき 西成田洋子 — 記憶の森 —

11月6日(土)~12月19日(日)

西成田は、日常使用され、不用となったカーテンや絨毯等の生活用品や着古したジャンパー、チョッキなどの衣服類、履きつぶした革靴やハイヒールなどを作品化の対象物に選んでいます。これらの品々は、人に使われ、時を経ることにより次第に劣化し、やがて商品としての価値や有用性を失ってしまいます。しかし見方を変えればこのような変化は、商品という均一化、記号化された衣を脱ぎ捨て、一つのモノとしての時間と記憶を宿した存在と化したのだ、とも解釈できます。

そして西成田が作品に用いる理由は、モノとしての姿を現し始めた対象物に対する生理的、身体的な感応を自覚し、そこに創作の起点を見出しているからだと思われます。

西成田と作品に用いられた対象物との関係は、個の身体性に依って成り立つため極めて私的であると言えます。しかし消費社会に生きる私たちもまた、身の回りを無数の消費財に囲まれており、それゆえ西成田の生み出した造形作品は、私たちにとって無縁の存在ではありません。

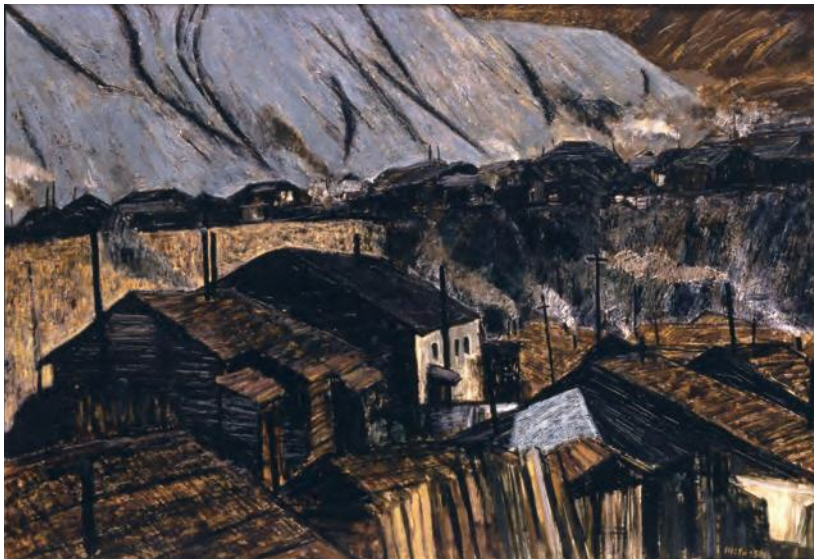
本展では、西成田の近作、新作を通して、その活動の一端をご紹介します。

(特任学芸員 平野明彦)



《記憶の領域2011-UFU》 2011年 撮影:齋藤さだむ

常設展示室から



若松光一郎 《小田炭砒風景》 1956年 油彩・カンヴァス



吉澤美香 《へー83》 1993年 ドライポイント、アクアチント・紙

令和3年度後期の常設展のテーマは「都市と美術」。古来より都市は美術家を惹きつけ、美術を育み、そして美術に題材を提供してきました。当美術館も、いわきという都市で育まれた美術文化に支えられ、1984年に誕生しました。今回は都市と美術の関係を探るべく、以下の6つの観点から作品を紹介します。

①都市へようこそ：ヴェナンツォ・クロチェッティ《サン・ピエトロ大聖堂門扉「秘蹟」(ひな型最終案)》は、作家が担当したローマ・カトリックの総本山、バチカン市国のサン・ピエトロ大聖堂扉口のブロンズ彫刻の1/5スケールのひな形。2012年に当館で回顧展を開催した時、クロチェッティ財団より寄贈を賜りました。都市の誇り、大聖堂の扉口から、どうぞ本展にお入りください。②いわきを描く：いわきの美術界を牽引した若松光一郎《小田炭砒風景》を始めとして、懐かしいいわきの風景を展示します。③都市を描く：世界の都市を描いた阿部幸洋、春日部洋らの油彩画を紹介。④都市の生活：都市間を結ぶ交通網を題材としたアラン・ダーカンジェロ、レオナルド・クレモニーニ。⑤都市の考古学：ロンドンやいわきの地面

の一面を、彩色ファイバークラスにより本物と見紛うほどに再現したマーク・ボイル。1964年東京オリンピック直前の東京の記憶を卵型の樹脂に留めた中西夏之《コンパクト・オブジェ》。⑥変容する都市：都市をモチーフ、テーマにしながらも作家の解釈、感性により様々に変容する造形を紹介します。

都市にまつわる秋冬の企画展と合わせて、どうぞ鑑賞ください。

一方、小企画コーナーは「版画・素描セレクション」。Vol. 1では連作として制作された版画を特集します。一連の作品によって、作家たちは何を追求したのでしょうか。「物語を紡ぐ」、「一つのテーマを掘り下げる」、「形のヴァリエーションを展開する」等、作家によりその意図は様々です。連作版画ならではの完成された世界観や変化する造形をお楽しみください。また、マルク・シャガールによる版画連作〈サーカス〉全38点を、Vol. 1、2に19点ずつ展示します。サーカスに都市の悲哀を見出したシャガールの幻想的な世界に浸ってみませんか？

(学芸員 徳永祐樹)

学芸員ノート | 美術館とSNS

今年の4月から6月にかけて開催された「Next World—^{ネクスト ワールド}夢みるチカラ」展において展覧会をどのように知ったかアンケートを取ったところ、「ポスター」に次いでホームページやSNSを含めた「ウェブ媒体」が2位を占めました。当館においてもネット上での広報活動がいよいよ重要になってきたといえるでしょう。多くの美術館が広報手段として^{ツイッター}Twitterや^{インスタグラム}InstagramといったSNSを用いるようになって久しく、国内の主要な美術館でも数万から数十万、海外の世界的な美術館ともなると数百万ものフォロワーがその美術館の投稿をチェックしています。

当館はというと、^{フェイスブック}Twitter、Instagram、facebookの三つのSNSを使用しており、それぞれのフォロワー数はTwitterが1,624、Instagramが1,203、facebookが575です(2021年8月31日現在)。主に展覧会や催し物の案内、実施した催し物の様子などを投稿しています。

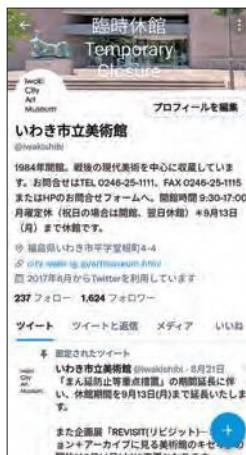
SNSはインスタントなメディアと思われがちですが、気軽に作品の写真を投稿するわけにはいきません。当館のコレクションのほとんどは著作権が有効であり、展覧会の作品においても著作権者や所蔵者の許可が必要となります。また、作品を掲載するときには見栄えに囚われ、作品本来の姿を見失ってはけません。あくまでも作品や展覧会そのものの魅力が伝わるように、それでいて多くの方の関心を引くことが

できるように写真や文章、タグ付けを工夫する必要があります。投稿一つするのに入念な準備や確認が必要となることも稀ではありません。

それでも多くの作家が作品写真の投稿を許可してくれた「Next World」展や会場内の撮影が可能であった「^{ツペラ ツペラ}tupera tuperaのかおてん。」はSNS上での反応も好感触であり、それがどのような展覧会で、そこでどのような作品を見ることが出来るのかを目に見える形で伝えることの大切さを実感させられました。

ハードルはありますが、今後も美術館の魅力が伝わるような投稿ができるように努めて参りますので、よろしければ当館のSNSをご一瞥、あわよくばフォローいただけましたら恐悦です。

(学芸員 伊藤圭一郎)



新館長からひとこと

作品のアウラだけでなく、館内で働くスタッフ一人ひとりが輝く、光あふれる美術館を目指したいと思います。(館長 杉浦友治)

今後の主な展覧会のご案内 (新型コロナウイルス感染症の拡大状況により、中止や延期、または内容等に変更が生じる場合があります。)

企画展

REVISIT—コレクション+アーカイブに見る美術館のキセキ

令和3年10月1日(金)~10月24日(日)

サーリネンとフィンランドの美しい建築

令和3年11月6日(土)~12月19日(日)

ニューアートシーン・イン・いわき 西成田洋子展

令和3年11月6日(土)~12月19日(日)

いわき市小・中学生版画展

令和4年1月5日(水)~1月16日(日)

第51回いわき市民美術展覧会

〈書の部〉令和4年1月21日(金)~1月30日(日)

〈絵画・彫塑の部〉令和4年2月4日(金)~2月13日(日)

〈陶芸の部、写真の部〉令和4年2月18日(金)~2月27日(日)

※館内メンテナンスのための休館 令和4年2月28日(月)~4月下旬(予定)

常設展後期

都市と美術

令和3年10月1日(金)~令和4年2月27日(日)

素描・版画セレクションVol. 1

令和3年10月1日(金)~11月28日(日)

素描・版画セレクションVol. 2

令和3年11月30日(火)~令和4年2月27日(日)